

教育目標		よい子 強い子 伊丹の子 -新しい時代を生きる徳・知・体の調和のとれた心豊かなたくましい子の育成-						
重点目標		①人間性の涵養につながる教育推進 ②全ての子どもの可能性を引き出す授業改善の推進 ③身体的・精神的な健康の保障と健全な食生活の推進 ④教育環境の整備、業務改善と学校安全の充実 ⑤地域とともにある学校づくりの推進						
主要施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない教育 ③学校・家庭・地域の協働	①研究テーマを「伝え広げ深め合う協働的に学ぶ子どもたちの育成」とし「話す・聴く・話し合うの系統化」「対話を生み出す手立て」「学び合える集団づくり」の3観点から研究テーマに迫る。 ②読み書き、計算などの基礎的な学力を児童に定着させる教育活動を計画する。 ③主体的に学ぶ力や意欲を育てる。	①多様な意見を認め合える集団づくりを形成する。 ①ペア、少人数のグループにおける対話的活動を通して、深め合える集団づくりを図る。 ①校内授業を全学年行うことで授業改善を図る。 ②昨年度までのチェックテスト(語彙、計算)から学がった課題を中心に、伊小タイムで「書く課題」「音読計算」を取り組み、習熟を図る。 ②週1回学年打ち合わせで学習の習熟状況を確認する。そして、定例会で報告し、学校全体で共有する。 ③土曜学習や校外での学習、ゲストティーチャーを招き、地域と家庭・学校が連携する。	①②③教職員、児童、保護者の3種のアンケートにおいて、学習や授業に関する質問に肯定的な回答が90%を超える。 ①校内授業を全学年行うことで授業改善を図る。 ②昨年度までのチェックテスト(語彙、計算)から学がった課題を中心に、伊小タイムで「書く課題」「音読計算」を取り組み、習熟を図る。 ②週1回学年打ち合わせで学習の習熟状況を確認する。そして、定例会で報告し、学校全体で共有する。 ③土曜学習や校外での学習、ゲストティーチャーを招き、地域と家庭・学校が連携する。	B	・教職員、児童、保護者の3種のアンケートにおいて、学習や授業に関する質問に肯定的な回答が90%を超えている。保護者は、80%を超える。 ・話し合うことに慣れ、話して聞くことができる児童が育ってきている。 ・地域とつながる学習活動を設定することができた	・伊小タイムで「書く活動」「音読計算」に取り組み、継続して習熟を図る。 ・週1回学年打ち合わせで学習の習熟状況を確認する。そして、定例会で報告し、学校全体で共有する。定着に復習の時間が必要ならば、復習課題を各学年で用意し、習熟を図る。 ・研究推進では、「児童の学びを見極め、授業に生かす実践を通して」をサブテーマに据え、子どもたちの声を見極めて協働的に学ぶことを目標とする。 ・地域教材・人材を積極的に取り入れ、カリキュラム・マネジメントを推進していく	・自己評価はBであるがアンケート結果や取組内容からは、十分に評価できる。 ・伊小タイムの取組がこの基礎学力の定着に結びついていると感じる。細やかな確認はとても大事だと感じる。今後も継続した取組を。 ・伊小タイムや地域と連携した学習は続けていきたい。 ・来年度の研究発表会に向け、引き続き課題意識を持って研修に励んでいきたい。 ・「教室はまちがよいところだ」の絵本のように間違えてよい、いろいろな意見がある、と理解しコミュニケーションをとって伝え合って、話し合っって答えを出すことは大人になっても大切なことである。引き続き話し合い活動を大切にしていきたい。
	新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①端末を活用し、適切に情報収集したり、工夫してアウトプットしたりできるように指導する。 ②間違いを恐れず英語での会話を積極的に取り組むことができる環境を作る。 ③スズキ校務やスクールタクトなどの活用により、業務の効率化や短縮を行う。	①児童が重点項目を達成できる機会がもてるよう、職員に対する技能研修を行ったし、活用方法の共有を図る。 ②定期的なペア活動やグループ活動を取り入れ、主体的に外国語で発話する態度を育てる。 ③入力や集計などの作業を見直し、効率化を検討する。	①技能講習を年間4回目標に行う。また都度アンケートをとり、ニーズに沿った講習が行えるようにする。 ②英語活動を2回に1回は行い、主体的に外国語を用いてコミュニケーションをとれるよう活用的な技能を身につける。 ③年度末成果として具体的な事例を挙げられる。	A	①端末の使い方など、講習や研修を4回実施した。 ②間違えても挑戦する児童が増えたが、積極的にない児童は変わらなかった。学習状況調査も英語の勉強は好きが75.2%で県・国より有意に高かった。 ③学びポットへの移行についてスムーズに進められたり、学校掲示板を活用した情報共有が行った。	①学期ごと定期的に活用事例などを伝える場を設ける。 ②必然的に英語を話さなければいけない状況を増やす。また目的や場面設定を明確にし、話したくなるような授業内容、環境づくりをする。 ③業務改善と連携して取り組んでいく。タブレットの活用方法等、定期的に研修をしていく。	・デジタル図書館の利用が予定冊数を大きく上回っている。子どもの読書習慣の定着のためにも、引き続き学習を進めていきたい。 ・タブレット端末の更新がスムーズに進むよう教委と学校、保護者と連携してよく協力がある。 ・英語・ICT教育の定期的な職員研修も必要である。 ・新システムへの移行の戸惑いが講習等でフォローされていて安心感につながる。
	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①学校教育活動全体を通して、豊かな感性と確かな判断力を養い、子どもたちが、豊かな人間性、自ら学び、考える力を育むために実際に自然や社会に触れる機会を設定する。生き方を求めている主体的に行動できる子どもを育てる。 ②問題行動やいじめの未然防止、早期発見を図り、児童が楽しく過ごせる環境をつくる。 ③不登校の早期発見、対応に努め、児童が安心して通えるように支援する。 ④子どもたちが豊かな人間性、自ら学び、考える力を育むために実際に自然や社会に触れる機会を設定する。	①他の道徳的教育活動との関連を図りながら、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養い、道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動しようとする態度を育てる。 ②③学年、生活指導部会、管理職間の円滑な連絡体制の確立、校内職員の共通理解を徹底し、チームで課題解決にある。 ④3年で環境体験学習、5年で自然学校を実施する。また、その他においても体験を意識してカリキュラムを作成する。	①児童アンケートにおいて「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて教えてもらっている」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ②教職員アンケート「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っているか」の項目で肯定的な回答が90%をこえる。 ③保護者のアンケート「先生は子どもの様子をよく見ているか」「子どもは生活のルールやマナーを守っているか」の項目で肯定的な回答が90%をこえる。 ④3年3回いじめアンケートを実施し、その都度いじめ対策委員会を開き、全職員で対応の行動を共有し、組織的な対応を検討する。 ⑤毎月、長期欠席児童の動向を共有し、組織的な対応を検討する。 ⑥環境体験学習、自然学校および、それに準ずる体験を実施する。プログラムを考える際には、自然や地域との関わりや集団(グループ)を取り入れる。	B	①児童アンケート「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて考えている」の質問に肯定的な回答が91%であった。 ②教職員アンケートでは、「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っているか」の質問に肯定的な回答が98%であった。 ③保護者のアンケートは、「先生は子どもの様子をよく見て、適切な指導を行っているか」「子どもは生活のルールやマナーを守っているか」の質問に肯定的な回答が高項目とも93%であった。 ④3年3回いじめアンケートを実施し、いじめ対策委員会に対応の重大事案であるかどうか、虐待事案について検討した。 ⑤不登校傾向の児童の居場所としてスマイル教室の認知が進んだ。来年度以降にシステムや児童の特性などをどのように引き継いでいけるかが課題である。 ⑥環境体験学習、自然学校ともに目的を持って計画・実施することができた。特に、自然学校でのひょうご冒険教育では児童が変わっていきが見られた。	①児童が自己肯定感を高めることができるように、道徳だけでなく学校生活において児童が周囲の人々と関わりながら、主体的に活動できる取り組みを計画・実施していく。 ②全職員での情報共有の仕方、管理職と生活指導担当との連携など、今年度うまくいったことに対しては引き続き取り組んでいく。 ③虐待と思われる事案が増えているので、保護者への説明や対応については慎重に行っていく必要がある。 ④スマイル教室での取り組みや児童の特性を全職員で共通理解し、児童に関わっていかねばならない。来年度、編成や体制が変化しても年度当初の関係作りは丁寧に行っていく。 ⑤来年度以降も引き続き、本校児童の様子と趣旨を照らし合わせながら環境体験学習、自然学校の場所やプログラムを検討していく。	・保護者アンケートで「先生は子どもの様子をよく見て…」が93%あり、先生方に対する信頼の高さが表れている。 ・虐待と思われる事案については子どもの命に関わるものもあるのではないかと、先生、学校だけではなく行政や警察などとも連携した対応が必要。 ・学校にきたけれど教室に入りづらい子どもとてスマイル教室の取組は効果がある。子どもの居場所や教室復帰の前段階として必要な取組である。 ・外的要因による不登校もある。これまでも違う対応が求められてきた時代になっている。世の中が難しくなっている。学校や地域も変わっていかねばならない。
	「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②発達段階に応じた健全な食育の推進	・運動に親しみ、楽しく取り組む態度を育てる。 ・学校行事や休み時間、教育活動全体を通じて、体力・運動能力の向上を図る。 ・心や体の健康に関心をもち、健全な生活を営む態度を育てる。 ・〈低学年〉だれとでも仲よく、楽しく運動できる子ども ・〈中学年〉課題をもち、工夫して運動を楽しめる子ども、体の発育・発達について理解できる子ども ・〈高学年〉課題をもち、活動を計画的に行い、運動の楽しさや喜びを味わうことができる子ども、心の健康及び病気の予防について理解できる子ども ②食生活や栄養の大切さについて理解し、実践できる児童を育てる。	・固定時間に応じた単元指導計画を立て、授業の充実をはかる。(1年 102時間 週3時間、2~4年 105時間 週3時間、5,6年 90時間 週2.6時間) ・研修・研究の機会があれば紹介すると共に、できるだけ参加する。 ・学年で作成したワークシート類をデータで保存し、活用する。 ・備品の充実、教具の整理をはかる。 ・全職員が体育の授業を充実して行えるように、自主研修を活用して、指導力向上を図る。 ・学校HP等を活用し、家庭でもできる運動について知らせる。 ②給食時間や高学年の家庭科の授業を活用して食事マナーや栄養面の理解を図る。	・「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が90%をこえる。 ・「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「体育の授業は楽しい」の肯定的回答が90%をこえる。 ・児童アンケートにて、「体を動かすことが楽しい」の肯定的回答が90%をこえる。 ・保護者アンケートにて、「子どもは、運動に親しんでいる」の肯定的回答が90%をこえる。 ②児童アンケート「早寝・早起き・朝ごはんを心掛けて生活している」の項目で肯定的な回答が75%をこえる。	B	○「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が男子が90%を上回った。 △「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が女子は81%にとどまった。【90%越えを目標】 ○「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「体育の授業は楽しい」の肯定的回答が男女共に90%をこえる。(男子96%女子90%) △学校評価では「体を動かすことが好き」の項目に肯定的な回答した児童が88%だった。 △高学年(4-6年)になると「よくあてはまる」も70%切り、(5,6年)の「あてはまらない」が4.6%、7.1%になっている。【80%越えを目標】【3%未満を目標】 △保護者アンケートにて「子どもは運動に親しんでいる」の肯定的回答は72%だった。【90%越えを目標】 ②児童アンケート「早寝・早起き・朝ごはんを心掛けて生活している」の項目で肯定的な回答が70.5%だった。	・全職員が体育の授業を充実して行えるように、自主研修などを積極的に活用し、指導力向上を図る。 ・学校評価でも読み取れるように(1-3年)は運動が好きなので、継続して楽しめるように授業の考え方も見直していきましょう。 ・家で取り組みたくなる運動課題などを例示し、子どもたちが進んで取り組める場や環境を設定する。 ②食育については、栄養教諭とも連携し、引き続き、保護者に情報を発信していきながら具体的に推進していく必要がある。	・早寝、早起き、朝ごはんには保護者への情報発信や啓発活動が大切である。保護者の健康と子どもの健康を考えてできることから取り組む。 ・1週間のキャンペーンなど一定の期間だけでも実践してもらえよう取り組んでほしい。 ・骨の成長のためにも高学年女子の運動が大切だとのこと。リフレクソールにもなるので、楽しみながら運動になるようなものがあれば。 ・啓発だけでは難しい。小さな目標を立てたり、短期間に重点的に取り組んだりして習慣づけしていきたい。 ・休み時間や放課後でよく運動遊びをしている印象がある。
教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	①夢や目標をもち、主体的な学びや活動ができる児童を育成する。 ②児童の心理的、福祉的な支援のために、管理職や特別支援教育Co.、生徒指導担当が窓口となり、SCやSSWの校内のケース会議等のへの参加等、積極的な活用を図り、「チーム学校」の構築を行っていく。 ③心理面、発達面等の悩みを抱える児童及び保護者の心の安定を図るために、特別支援教育Co.が中心となって、支援体制(特別支援教育、生徒指導)を構築し、運用している。	①キャリアパスポートを活用し、一人ひとりが目標を持って学校生活を送れるよう指導にあたる。 ②SC派遣(週1)では、カウンセリング後、ケースに応じて、情報共有を行い、指導や支援に活かす。SSWはケースに応じて、適時連携を取り、ケース会議等に参加し、専門的な視点で支援に活かしていく。 ③支援体制を可視化し、学年、特別支援部会、管理職間の円滑な連絡体制の確立、校内職員の共通理解を徹底し、関係機関との連絡や調整等を行う。	①児童アンケートで「目標をもって学習や行事に取り組んでいる」という質問への肯定的回答が80%をこえる。 ②教職員アンケートで「特別支援教育コーディネーターが中心となって、ケースに応じて、SC、SSWの活用ができてきているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ③教職員アンケートで、「特別支援教育コーディネーターが中心となって、支援体制に沿った連携等により、校内職員の共通理解ができていくか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。	B	①児童アンケートの結果、「目標をもって学習や行事に取り組んでいる」に対する肯定的回答は90%と目標を達成することができた。 ②教職員アンケートで肯定的な回答が98%とあるように、カウンセリングを必要とする児童や保護者にとって、SCとの時間は有効活用できた。守秘義務の関係上、カウンセリング内容を知ることにはできないが、保護者から情報共有OKをもらっている家庭に関しては、当該児童の学級担任と連携もできた。(課題)今年度も昨年度同様カウンセリングの需要を高く、予約が埋まっている状態である。 ③教職員アンケートで肯定的な回答が94%とあるように、特支Co.が校内支援体制図で共通理解を図ったり、支援部の先生方も中心となって、学年の支援体制の共有や連携を取ったりすることができた。 (課題) ・対象となる事案があまりにも多く、一部の教員に負担がかかることも多く、人手不足が否めない。 ・全校児童1000人を超える学校で学級に個別の支援が必要な児童が多く、担任や教科担当を担いながら、特別支援Co.が校内の児童の実態を全て把握することは非常に難しい。 ・支援が必要な児童が多くなっている中、担任が一人でもれなく見ることは難しい状態である。特別支援教育支援員の先生を増やしてもらおうように働きかけていく。	・支援が必要な児童の人数に合わせて十分な支援員の先生を要望していく必要がある。 ・どこも人材不足、与えられた人材の中でやっていけないう。学校としては組織的に対応している。A評価でよい。 ・放課後デイなど事業所と学校での連携を進めていきたい。 ・教育委員会の相談やその他の相談機関ともつなげたい。 ・相談内容の多様化、支援の必要な家庭や児童の増加に今後とも柔軟に対応していきたい。		

<p>特別支援教育の推進</p> <p>①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実</p>	<p>①特別支援学校センターの機能の活用を活かして、校内支援体制を通して必要なアドバイス(コンサルテーション、巡回相談)を受けたり、実践講座を受けたりして、専門性を伸ばす。 ②児童一人一人の実態を把握し、適切な教育支援を行うことにより、児童の可能性を引き出し、確かな学力の向上と豊かな心の育成を図り、生きる力(自立)へとつなげる。</p>	<p>①校内支援体制における支援の中で、ケースに応じて、必要なアドバイスを希望、申請したり、実践講座を受けたりする。 ②児童の実態を掴むため、支援の必要な児童について情報共有する場を設定する。 ③個に応じた教育支援計画等を作成し、適切な対応を行う。</p>	<p>①教職員アンケートで「校内支援体制を通して、ケースに応じて、必要なアドバイスをを受けたり、実践講座を受けたりして、日々の教育実践に活かすことができているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ②児童についての情報交換の場を毎月(部会)設定する。 ③年2回以上各クラスの実態や学級経営、支援の必要な児童の理解について交流する。(生活人権支援研修会、ひまわりこえ研修会) ④必要に応じてサポートファイルを作成し、学校と家庭が連携しながら、継続した支援を行う。(毎学期) ⑤支援員、担任と連携し、児童の実態に応じて支援体制を見直す。(毎月) ⑥必要に応じて、教育相談や巡回相談につなげる。</p>	<p>B</p>	<p>①教職員アンケートで肯定的な回答が96%となっているように、校内支援体制をもとにケースに応じて、必要なアドバイス(コンサルテーション、巡回相談)を受けたり、1年間を通して、1人1回は実践講座を受けたりして、専門性を伸ばしていくことができた。校内支援体制は前年度の課題を生かし、生活指導と連携し、児童の実態を元に組織的に対応した。また、校区に児童精神科を開業されている石原Dr.に巡回相談、講演をいただき、児童理解を深めた。特支Co.として、定期的に発行される教育支援センターだよりを掲示したり、学期に1度の「特別支援教育通信」を発行してきたことで、教職員の取組(授業UD、人的UD、物的UD)を周知することができた。(課題)対象となる事案があまりにも多く、一部の教員に負担がかかることも多く、人手不足が否めない。 ②毎月の部会、生活人権支援研修会兼ひまわりこえ研修会、特支Co.が中心となって、必要に応じてサポートファイルを作成し、学校と家庭が連携しながら、継続した支援をしてきた。特支Co.が中心となり、支援員と担任が連携できるように、児童の実態に応じて支援体制を見直したり、必要に応じて教育相談や巡回相談につなげたりしてきた。(課題)支援を必要としている児童の数に対して、支援の手が十分ではない。人員配置を要望するとともに、効果的な支援方法の検討が必要と感じる。</p>	<p>①今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には様々なところで動いて頂いた。教職員アンケートで「様々な立場や考えの講師の方の話を聞きたい」と意見があったので、来年度は校内研修で講演をして頂く予定である。 ②学年間や校内全体で学習面、生活面等で児童が学びやすく、過ごしやすい環境づくりに向けて、今後も継続して、基礎的環境整備(UD化)等に取り組み。また、担任が子どもの変化や小さなサインへの気づき、学年間での児童の実態把握、特別支援部会での情報共有し早急に対応できるように、支援が必要な児童を見るポイントを校内で確認する。</p>	<p>・特別支援教育等に関する講演は、就学前施設の職員も参加し共に学び合いたい。 ・支援する人員が不足しているため、早急な人員増加が必要。引き続き要望していきたい。 ・様々な講師の話や研修を通して、伊丹小学校にあった考えや講師をみつけていくことは重要。 ・引き続き、教員間で情報を共有し、組織的に対応することが大切。 ・保幼小中、関係機関と連携し、連続・継続した支援体制を築きたい。</p>
<p>教職員の資質向上</p> <p>①研修等の充実</p>	<p>①時代、課題に応じた研修を実施し、学校教育目標の具現化や個々人の能力アップに努める。</p>	<p>①現状での自校の課題から精選した研修を実施する。</p>	<p>①教職員アンケート「子どもを取り巻く課題や必要とされる教師の資質・能力に即した校内研修を行っている」の項目で肯定的な意見が95%をこえる。(昨年度98%)</p>	<p>A</p>	<p>①教職員アンケート「子どもを取り巻く課題や必要とされる教師の資質・能力に即した校内研修を行っている」の項目で肯定的な意見が95%であった。</p>	<p>①業務改善や会議のスリム化が進められる中、各分掌の担当者や連携して研修の精選をすることができているので、引き続き情報交換しながら検討していく。</p>	<p>・業務改善をしながらの研修は大変だろうが、熱心に研修している今の状態の継続を期待する。 ・様々な教育課題がある中、若手教員だけでなく、40代～60代の教員の積極的な研修参加により、教員全体の資質向上を進めていってほしい。</p>
<p>学校を支える組織体制の整備</p> <p>①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築</p>	<p>①学校運営協議会委員と学校の課題を共有する。 ②保護者、地域との温かい「横の連携」と幼小中の「縦の連携」を強化し、教育環境の拡充を図る。</p>	<p>①学校運営協議会委員と教職員の合同研修会を開催し、学校運営に生かす。 ②学校だよりやHP等を活用し、積極的な情報発信に努めるとともに、地域行事等の案内や情報を教職員にも知らせ、連携していく。 ③九九学習や社会科・生活科の学習で地域に出かけたり、地域のひととの交流を行ったりする。</p>	<p>①「育てたい子ども像」「学校と地域の連携」について、教職員と学校運営協議会が話し合う研修会を1回以上開催する。 ②各学年2回以上のHPの更新をし、保護者アンケート「学校は、各種おたよりやホームページなどを発行している」の項目で、肯定的な意見が97%であった。 ③HPについては、各学年2回以上の更新ができなかった学年もある。 ④地域行事や隣施設行事等をGoogleClassroomで発信することができた。 ⑤生活科や社会科、総合的な学習の時間、九九の学習などで保護者や地域の方に協力していただき、地域とのつながりが深まってきたと感じている。</p>	<p>B</p>	<p>①8月に学校運営協議会委員と教職員との合同研修会を行い、「育てたい子ども像」や「地域との連携」について話し合うことができた。 ②保護者アンケート「学校は、各種おたよりやホームページなどを発行している」の項目で、肯定的な意見が97%であった。 ③HPについては、各学年2回以上の更新ができなかった学年もある。 ④地域行事や隣施設行事等をGoogleClassroomで発信することができた。 ⑤生活科や社会科、総合的な学習の時間、九九の学習などで保護者や地域の方に協力していただき、地域とのつながりが深まってきたと感じている。</p>	<p>①今後も学校運営協議会との合同研修会を通して、学校の課題と取組を共有していきたい。 ②HPへの写真掲載については市の方針も確認しながら慎重に取り組んでいく。HP以外の安全で多様な情報発信方法を研修を行った上で、柔軟に取り入れていきたい。 ③教職員が地域の人・もの・ことについて学ぶ場を設定したり、今年度学習活動に取り入れた地域のお店や工場とのつながりを続けていったりしながら、カリキュラム・マネジメントを進めていく。 ④保育所・幼稚園・中学校と学びをつなぐための研修や交流の場を設定していく。</p>	<p>・ボランティア活動中、教員からあいさつされることが増え、活動している私達も嬉しいです。 ・たくさんの情報がスマホなどで手に入る時代だが、「知っていること」と実際の「やったことがある」とは大きな違いがある。実体験をできるだけ多くさせてあげてほしい。 ・地域と連携した学習を進め、それを発信することで子どもの自信につながる。今後の取組を期待する。</p>
<p>教育環境の整備・充実</p> <p>安全・安心な教育環境の充実</p> <p>①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進</p>	<p>①緊急時に安全に素早く避難・対応できるように備える。 ②日ごろから、教師の指示を静かに聞かせて適切に動く。 ③児童が安全に登校できるように指導する。 ④児童が安全に学校生活を送ることができるよう安全を確認し、必要であれば修繕、改修する。 ⑤教育目標の実現、働きやすい環境づくりに向けて、教職員に働きかける。</p>	<p>①状況に応じて自分で判断できるよう学級・全体で指導する。 ②全校生が集まったときに話をしっかり聞き、素早く動くことができるよう指導する。 ③全職員で児童の登下校の取り組みを見守り、指導する。 ④定期的に安全点検を行い、迅速な対応をするとともに安全な施設設備の使い方を適宜指導する。 ⑤職員会議については、部会・学年打ち合わせ等を活用して、提案や協議事項を精査し、スリム化を図る。 ⑥業務改善モデル校や市内の小中学校の実践事例を参考にし、本校の業務の行い方を改善していく。 ⑦ICTの活用により業務の効率化や短縮を図る。</p>	<p>①②③つの訓練(火災、防犯、地震)を行い、それぞれの対応を学び速やかに、避難することができる力をつける。 ④安全に気を付けて、事故なく登下校できる。 ⑤毎月安全点検を行う。 ⑥保護者アンケート「学校は、学習の場として子どもが活用しやすい環境が整っている」の項目で肯定的な意見が85%をこえる。 ⑦教職員が意見やアイデアを積極的に業務改善を目指す。</p>	<p>B</p>	<p>①5月に保護者同伴訓練を実施し、災害時等の対応に生かすことができるようになった。 ②年3回の避難訓練も運動場に安全に避難する訓練ができた。 ③2学期には、防犯訓練で警察の方と協力して実施し、全校児童の前でお話もいただいた。 ④教員による校内研修では、不審者と判断したらすぐに110番することやさすまた等での対応などしっかり身に付けていくことができた。 ⑤登下校で右側通行や安全に気を付けた歩き方を指導した。 ⑥修繕が必要な箇所があったときには毎月の安全点検をもとに技能員を中心に速やかに改善にあたることができた。 ⑦保護者アンケート「学校は、学習の場として子どもが活用しやすい環境が整っている」の項目で肯定的な意見が92%だった。 ⑧職員会議や連絡会について、提案の仕方をマニュアル化し、スリム化を図った。 ⑨業務改善モデルや他校の実践事例を参考にし、退勤時刻の目標ボードを掲示することで時間を意識して勤務できるようにした。また、校内の鍵の精選・整理や職員室内の物の整理を行うことで、教職員が働きやすい場を整えられるよう、取り組んだ。 ⑩来年度に向けて、のびる力や留守番電話の設定時刻の変更、家庭環境調査票と安全カードの様式の見直し、家庭訪問や懇談会の方法の見直しなどを進めた。</p>	<p>①来年度も今年度同様に、早い段階の保護者同伴訓練を行い、保護者との連携をしていく方向で考えている。児童クラブに人数が増えていることから、教室での同伴訓練を考えていく必要がある。また、集団下校する児童の人数が多いので、非常時の時の訓練であることを保護者に強く伝えていく方向が必要である。 ②10月の防犯訓練では、携帯での連携をより進めていくと不安な児童が減ると考えている。さすまただけでなく、懐中電灯や消火器等も使って身を守っていききたい。また、校内研修は夏休みに行い、自分の担当を把握して早い段階から動けるようにしておく。 ③学校生活では、廊下を走る子が多いので、生活部と協力して対策を必要とする。また、給食担当と廊下の使い方の方向性を話し合い、普段から整頓されようかしていく。 ④今年度吸い上げた意見で、まだ進められていないものについては、来年度以降に検討していく。また、今年度は1学期に1回だけの意見の吸い上げだったので、定期的に行い、業務改善に務めていく。</p>	<p>・定期的な訓練や細やかな体制は、保護者や児童にとって安心できる学校につながる。 ・引き続き訓練については、早めに日程と必要性を保護者に伝え、同伴訓練に参加してもらうようにする。非常時の訓練でも有日常の通学路の安全確認にもなる。 ・今後も市教委と連携しながら、働き方改革を進め、児童や職員の過ごしやすい学校づくりを進めていってほしい。</p>

学校関係者評価総括

・学校の自己評価ではB評価が多いが、教職員自身が課題意識を持って日々の教育活動に取り組む姿勢が見られ、教育活動は概ね良好であるといえる。
・不登校や支援の必要な児童の増加、虐待と思われる事案など、多様な課題に組織的に対応している。しかし、世の中が変わってきており、これまでと同じ取組では対応できなくなってきた。人材不足については、要望していく必要があるが、限られた人員の中で柔軟に対応していくことが急務であり、これまで以上に。関係機関等とも連携していかなければならない。
・生活リズムや家庭での読書習慣、運動については、保護者への啓発に加え、目標や期間を設けた取組など、工夫していく必要がある。
・中学校との連携もさらに進めていってほしい。

次年度に向けた重点的な改善点

・初任者からベテランまで、教員それぞれのキャリアに応じた研修への参加を勧め、変化激しい世の中に柔軟に対応できる指導力をつけていく。また、学校や児童の実態に応じた講師を招聘し、学力向上や特別支援教育等の研修を進める。
・体験活動や地域と連携した学習を進め、それを発信することで子どもの自己肯定感を高めていく。
・不登校や支援を要する児童の増加については、市教育委員会に対して協力を求めるとともに、さらなる組織的な支援体制の構築を進めていく。
・生活リズムや読書・運動習慣については、学校だよりやHPでの保護者啓発に加え、児童と保護者がともに目標をもったり、期間限定で取り組んだりするなど、工夫して学校と家庭、地域が一体となって取り組んでいく。
・就学前施設や北中学校、北中学校ブロックの小学校との合同研修や、児童の交流などを進める。

自己評価の基準 **A**: 目標を上回った **B**: 目標どおりに達成できた **C**: 目標をやや下回った **D**: 目標を大きく下回った